

4日 土曜

列王 I



13:1 一人の神の人が、【主】の命令によってユダからベテルにやって来た。ちょうどそのとき、ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。

13:2 すると、この人は【主】の命令によって祭壇に向かい、これに呼びかけて言った。

「祭壇よ、祭壇よ、【主】はこう言われる。『見よ、一人の男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

13:3 その日、彼は一つのしるしを与えて、次のように言った。「これが【主】の告げられたしるしである。見よ、祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。」

13:4 ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして「彼を捕らえよ」と言った。すると、彼に向けて伸ばしていた手はしなび、戻すことができなくなった。

13:5 神の人が【主】のことばによって与えたしるしのおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。

13:6 そこで、王はこの神の人に向かって言った。「どうか、あなたの神、【主】にお願いして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手は元に戻るでしょう。」神の人が【主】に願ったので、王の手は元に戻り、前と同じようになった。

13:7 王は神の人に言った。「私と一緒に宮殿に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたいのです。」

13:8 すると神の人は王に言った。「たとえ、あなたの宮殿の半分を私に下さっても、私はあなたと一緒に参りません。また、この場所ではパンも食べず、水も飲みません。

13:9 というのは、【主】のことばによって、『パンを食べてはならない。水も飲んでではない。また、もと来た道を通って帰ってはならない』と命じられているからです。」

13:10 こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、ほかの道を通って帰った。

ヤロブアムの行為、すなわち勝手な祭壇と礼拝が神に反逆するのであることが、ここでは明かにされました。これによって神様の律法と預言とは、生きて権威があるものだということが明確になりました。

それにはこの「神の人」がその使命を果たしたのです。彼は王に捕えられそうになり、危険を犯してでも、主のみこころを告げずにはいられませんでした。彼は無名でしたが、その働きの主は、ヤロブアムの「手はしなび…」というわざによって答え、そこに権威を表してくださいました。

私たちにとっても、よき働きの必要なのは、有名であるか評価されるかといったことではなく、主のみわざです。そのためには自分のことを犠牲にしてでも主のために、主のみこころがなるために…という価値観が大切です。

またヤロブアム王の招きに応じていたら、歓待されて良い目を見たかもしれませんが、それには目もくれずに、主の警戒に従いました。自分を喜ばすよりも主に従う者になりたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

